

岩崎 純一 著

『岩崎純一全集』 第七十九卷「芸術、文化、言語、文学（一の九）」

スポーツ、体育、諸芸、娯楽

編纂、監修 岩崎純一学術研究所 『岩崎純一全集』編纂局

巻頭言

本巻は、『岩崎純一全集』の第七十九巻を成し、岩崎の言語の著作物のうち、スポーツ、体育、諸芸、娯楽に関する述作を収める。

目次

巻頭言

第一編 〇歳～十九歳

第二編 二十歳～二十九歳

じゃんけんグリコと将棋

拙著『私には女性の排卵が見える』の読者から頂いた質問、及

び日本の女子スポーツの個人的な展望

テレビの話（アニメ、F1など）

第三編 三十歳～三十九歳

『六方将棋解説』

二〇一四年のF1のレギュレーション変更

今季のえげつないF1も終了

F1新カーナンバー発表！

音速のヒーロー、ミハエル・シューマッハ

今季F1が開幕し、可夢偉がマッサに激突・・・

フェリペ・マッサの不調の原因を考える

テニスの話（錦織圭選手の準優勝、グリップやフォームの話など）

電動フォーミュラカーレースシリーズ「Formula E」が開幕！！

ビアンキの無事を祈り、チェザリスの死を悼む

ジュール・ビアンキの事故についての続報

将棋三昧の年末年始

「電王戦×TOYOTAリアル車将棋」の感想

将棋NHK杯で久々の二歩発生！

今季F1も開幕間近、Formula Eにも引き続き期待

「将棋電王戦 FINAL」の感想（「人間対将棋ソフト」のはずが

「人間対人間の揉め事」に・・・）

F1ジュール・ビアンキの死亡事故

第四編 四十歳～四十九歳

第五編 五十歳～五十九歳

第六編 六十歳～六十九歳

第七編 七十歳以降

第八編 著者の一部および著作権者が岩崎純一であるもの

第九編 著作権者が岩崎純一であるもの

第二編 二十歳〜二十九歳

じゃんけんグリコと将棋

二〇一一年二月十四日 起筆、攔筆、公開

今日、世間はバレンタインデーで盛り上がっている。バレンタインデーと言えばチョコレートだが、そのチョコレートから思い出したのが、小学生の頃にやっていた、「じゃんけんグリコ」という遊びである。友人とじゃんけんをして、グーで勝つと「グ・リ・コ」と言いながら三步進む。チョキで勝つと、「チ・ヨ・コ・レ・イ・ト」と言いながら六歩進む。パーなら「パ・イ・ナ・ツ・プ・ル」で六歩。

僕はこのゲームに弱く、帰り道で一人だけ遅れて、じゃんけんができないほど友人から遠ざかって、よく泣いていた。

そこで、今さら気づいたのだが、僕はじゃんけんを共感覚の色でやっている気がするということなのである。気がするどころではないかもしれない。今でもグーは焦茶色、チョキは黄色、パーは薄青色なのである。

「じゃんけんはい」をして相手の手を見た瞬間は、指の数や形を見た瞬間に、「自分は茶色だから黄色に勝った」という判断をしている。

共感覚と長年向き合い、著書まで出したのに、今さら気づいた。

幼少期にも何度かじゃんけんをした記憶はあるが、おそらく幼少期には、指の数（数概念）や形という概念がよく分かっておらず、相手が手を出した瞬間に自分の脳と体がある種のパニック症状を起こしており、「勝ち負け」なるものを判断するには色を見た方が早いと感じていたのだと思う。その感覚について学童期に自覚的になり、今改めて気づいたのだと思う。

もう一つ、最近気づいた共感覚。僕は、同じ漢字であっても、将棋の駒の漢字とそれ以外の日常の漢字とで、見えている色が異なる。つまり、将棋を指しているときは、目が漢字を見ているのではなく、駒の動きを色でとらえていると思われる。だから、「青が紫をとる」、「赤紫を打つ」などというのが将棋だと思っている。

ただし、当時の僕は、将棋はそんなに強いと言えるほど強くはなく、一級レベルの「森田将棋」にたったの一度だけ勝った程度だった。

王・玉（黒）

竜（普段は焦茶、将棋盤上では紫茶）

飛（紫）

馬（普段は茶、将棋盤上では赤茶）

角（赤紫）

金（普段は黒・黄・茶、将棋盤上では青）

全（普段は青、将棋盤上では黄緑）

銀(黄)

圭(普段は茶、将棋盤上では紺)

桂(茶)

杏(普段は橙、将棋盤上では濃い桃)

香(紅)

と(普段は灰白、将棋盤上では水)

歩(普段は薄桃、将棋盤上では黄土)

拙著『私には女性の排卵が見える』の読者から頂いた質問、及び
日本の女子スポーツの個人的な展望

二〇一一年七月十九日 起筆、公開

二〇一一年八月五日 最終更新

八月五日追記メモ。

本日八月五日の「徹子の部屋」に、なでしこジャパンの澤穂希選手が出演されるということで、録画。澤選手自ら、女子スポーツ選手における排卵や月経との向き合い方について言及された。むろん、デリケートな話題を避けた一般視聴者向け番組なので、私の記事ほど細かな内容ではないものの、「排卵時には筋力が落ちる」などの生

理学上の知見を述べていらっしやった。

その葛藤に満ちた表情を拝見していると、やはり「女子サッカー」と言っても、それは「女性として生きること」とは少なからず逆ベクトルを向いている厳しいスポーツなのだ、改めて感じさせられた。

むしろ、そのことにすでに気づいているのは監督や10~20代の若い女子選手の方で、「ウチの娘を澤選手のように育てたい」などと普通にインタビュに答えている教育ママなどを見ると、一般女性の中に「女性がどういう身体を持った存在か」が分かっていない女性が増えていのではないかということ、改めてひしひしと感じる昨今である。

(追記終わり)

...

このたびの「なでしこジャパン」の活躍には私もとても感動したが、それに関連して、拙著『私には女性の排卵が見える』の読者の女性お二人から、ある全く同じご質問を頂いた。デリケートだがとても意義深いご質問だったので、少し前置きが長くなるが、書いてみたい。

私は、日本の女子スポーツにも関心はあるが、選手個々の人生や競技種目への関心と同時に、今後日本の女子スポーツが世界に出

ていくときに抱えてしまう課題への関心も持っているつもりである。むろん、自身の「女性の性周期が色で見える共感覚」との関連が大きい。(拙著を参照。)

特に、日本人女性が欧米発祥のスポーツをおこなうことで生じる身体の変容については、興味を持って見てきた。私は個人的には、まだ正しいかどうかは分からないが、「一般日本人女性の身体自体も昔に比べてかなり変化しているとは言え、日本の女子スポーツ選手は、いっそう一般日本人女性の身体と乖離したプロ集団化していく」という予想を持っている。

昔は畑仕事や海女仕事や舞など自然の重力に従う動きが多かったが、陸上・サッカー・フィギュアスケートなど、自然の重力に反抗する力学を必要とし、長期間に渡って卵巣や子宮に震動・衝撃を加える「スポーツ」を一部の日本人女性がやる時代となった今、日本においては、男性スポーツ選手と一般男性の身体の違い以上に、女性スポーツ選手と一般女性の身体の違いのほうが目立っていくだろうからである。

女子陸上については、元より世界・日本を問わずタブーではなかった気がするが、今回「なでしこジャパン」の活躍が目立った日本の女子サッカーについても、元日本代表選手の水間百合子さんが性同一性障害を告白したり、学者らにより女子選手の性機能不全、身体の男性化、性的マイノリティなどが研究・報告されるなど、世界や日本の女子サッカーを支えている女性にどのような女性が多いか、そのような女性と一般女性との違いを語ることがタブーでなくなっ

ているのは、良いことだと思う。

そのほとんどは、やはり「ホルモン分泌の一般日本人女性との違い」という視点のようだ。最近では、日本人女性が将来的に白人女性や黒人女性に太刀打ちできることを目指して、初潮よりも早くスポーツを始めると、先天的な性同一性障害・両性具有ではなくとも、それに近いホルモン分泌機構を持つ身体を作り上げることは可能であることが示唆されている。

過剰な運動によって女性ホルモン(エストロゲンなど)分泌が変容することは当然考えられるが、実は、以下の論文報告にもあるように、成長ホルモン、成長ホルモンに構造が近いプロラクチン、女性の体内に元々微量ある男性ホルモンであるテストステロン・ジヒドロテストステロン(DHT)・ジヒドロエピアンドロステロン(DHEA)などの分泌の変容が、無排卵月経・排卵停止・月経停止に加担していることが示唆されている。

ただし、その科学的知見の「使い方」は目的によって違い、学者や産婦人科医なら、「プロでもない一般女性の運動のやりすぎに警鐘を鳴らす」方向に使うし、女子スポーツの監督なら、「女性としての身体を犠牲にしても女子選手を世界レベルにまで引き上げる」方向に使う、ということだと思う。

一番難しいのは、「ごく普通のXX性染色体を持ち、将来の妊娠・出産も望み、異性愛の女性としてスポーツをやりたいと思っている女性」を、科学的知見を知った上で指導する、博識な指導者の心理だと思う。特に、そのような男性は、それなりの覚悟を持っていな

ければ、女子スポーツの指導に当たることができなくなっていくのではないかと思う。

初潮前後から陸上やサッカーなどをやらせると後々まで性機能に後遺症が出るとの知見が明らかになっていく昨今、「女子スポーツ」というものが、結局、一般の我々国民が思うような「女性のスポーツ」ではなくなっていくことを意味するからだ。今後の日本の女子スポーツは必然的に、「生理学的知見への忠実さ」よりも、「勝利への渴望」のほう求められることになる。

小柄な日本人女性が世界レベルを目指すということは、「女性としてスポーツをやる」のでありながら「一定程度以上は女性の機能を失う」というパラドックスを意味するのだし、そもそも、女性である自分が嫌で、女性であることを超克するためにサッカーに励んでいる女性もいるのだから、マスメディアがこのたびの女子サッカーの話題を利用して、「これぞ日本の女だ」、「日本の女は強い」といった言葉遣いをしたことは、少なからず的外しているかもしれない。「日本人女性それぞれが何に取り組むかは自由だが、少なくとも、物事に取り組む一生懸命さは、なでしこジャパンから学ぶべきものがある」という言い方をすることが、マスメディアの文化的・社会的な役割ではなからうかと思つた。

さて、なぜこのような、陰で展開されている生理学的知見を前もって書いたかと言うと、拙著の読者の女性お二人から、「岩崎さんは、いわゆる私たち一般日本人女性から見ても外見や内面が男性に近いと思える、あるいは男性かと見間違えてしまう女性スポーツ選手に

も、共感覚色が見えるのですか？」というデリケートな質問を頂いたからである。

一般の女性にしてみれば、このような質問はタブーと感じるようで、申し訳なさそうにご質問なさるわけだが、むしろ学術レベルではそうではなく、「女子サッカー選手には、元より男性的であるか、男性化した女性が多い気がする」という異性愛の女性が感じる直観は、すでに報告済みの正しい科学的知見そのものである、ということを示しておいたというわけである。

また、この話題は、私が二冊目の拙著であえて書かなかつたほとんど唯一の話題でもあるが、結論だけを書くのは良くないし、かと言って、前置きとして先のような生理学的知見を書く紙面がなかったために、省かざるを得なかつた。

結論を言うと、一度だけ、女性としての性機能がほとんど停止している女子スポーツ選手に直接お会いしたことがあるが、その場合、やはり一般男性に対して共感覚で色を感じないのと同程度に、色を感じなかつた。重要なのは、今の日本は、そういう体質のことを「女子」と呼んでいるということである。

逆に言えば、「女子スポーツ」の「女子」という言葉が「女性の性機能を持つている」ことを条件に入れていかない見通しが許されているところに、日本の女子スポーツの「強み」があるということである。「女性の性機能を持つている」ことを条件に入れてしまうと、世界で戦うことは諦めなければならぬ。

日本人男性の場合、男性のまま体力や技術（身長や体重など、

追いつけない要素以外の要素)を欧米白人男性や黒人男性並みに近づけるしか、残された手段がないわけだし、そもそもルールが日本寄りにならない限り、世界の頂点に立つことはできないだろうが、日本人女性の場合、身体機構・ホルモン分泌自体を合法内で男性化させる、あるいは、最初から身体が男性的である女性を連れてきて選手に育てる、という手段があることになる。

むしろ、「すでに世界の女子スポーツの流れの中で、そういう手段をとるようになってきている」ことが、生理学上の知見としてタブーになっていない現状に、私は個人的な関心を持っている。

このような生理学的知見に目を通さずに、今回の「なでしこジャパン」など日本の女子選手の活躍をきっかけに、安易に「ウチの娘にも小さい頃からサッカーをさせたい」と思う母親が出てきたり、サッカーを過剰にやることで生じる性機能の異常の知識無しに「私も女性としてサッカーをやりたい」と思う一般女性が出てきたりしないためにも、我々一般国民は、女子スポーツを盛大に応援しつつも、同時に今以上に冷静でいたほうがよいとも思う。

論文例

女子サッカーチームにおける月経異常の分析

<http://sc.chat-shuffle.net/paper/uid:110001944028>

女性アスリートにおける栄養摂取と体脂肪の蓄積状況が性ホルモン及び好中球機能に及ぼす影響について

[http://repository.ul.hirosaki-u.ac.jp/dspace/bitstream/10129/4422/1/HirosakiMedJ_62\(1\)_44.pdf](http://repository.ul.hirosaki-u.ac.jp/dspace/bitstream/10129/4422/1/HirosakiMedJ_62(1)_44.pdf)

スポーツ活動における骨粗鬆症：女性の運動と摂食障害および月経異常の重要性

<http://sc.chat-shuffle.net/paper/uid:10026155025>

Dale E, Gerlach DH, Wilhite AL. Menstrual dysfunction in distance runners. *Obstet Gynecol.* 1979

De Cree C. Sex steroid metabolism and menstrual irregularities in the exercising female. A review. *Sports Med.* 1998

テレビの話 (マニマ、F1など)

二〇一二年三月二十二日 起筆、搁筆、公開

時間的に多忙というわけではないが、年度末・年度始のことで色々頭が多忙なので、ブログ更新も間が空いてしまった。ブログ更新は入力するのに手を動かすが、手を動かさずに楽しめるのはテレビ、というわけで、テレビの話。

私が見るテレビ番組は、ニュース・天気予報が中心だが、唯一必ず見るのがF1で、時間があれば、おじやる丸やリトル・チャロなどを見ている。あとは、ブラタモリや2325など。ほとんどが録画。チャロは、英語の教材用アニメだが、ストーリーそのものが哲学的で興味深いので、好きで見ている。プリズン・ブレイク（アメリカのドラマ）も見ていたが、先日再放送の最終回があって、休憩中。

おじやる丸は、原案の方が飛び降り自殺でお亡くなりになったとのことで、本当に残念だが、しかし今も、原案者の理想の形からの改変もほとんどなく、ほのぼのとした雰囲気、最近では宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』を元に話を作るなどして、非常に良い出来であると思う。

昔はドラえもんを一番よく見ていたが、最近は見ていないので、あまりよく知らない。私が唯一全巻持っていた漫画が、確かドラえもんである。その頃の時代と比べると、かなり変わっている点もあるようである。むろん、生身の人間である声優だけは、どうしても交代していかざるを得ない要素だが。

私は、今でも「まんが日本昔ばなし」が一番好きな漫画・アニメなので、数年前のように復活してくれないかと思う。おじやる丸はドラえもんを参考に作られたアニメだが、しっかり者とぼんやり者

の設定が逆になっている。もしドラえもとカズマが組んだら出来杉君も驚きそうなしっかりしたストーリーができそうだが、のび太とおじやる丸が組んだら大変なことになりそうである。

他には、手塚治虫のブラックジャックも好きである。

さて、何と言っても、今年もF1が開幕し、テレビ観戦するのが楽しみな時期が来た。しかし、相変わらず、私が好きなドライバーのマッサは調子が悪そうである。たった今、「チーム解雇か」とのニュースが・・・。今年フェラーリのマシンの出来自体があまりに悪く、おまけにチームメイトのアロンソ優先でチームが動くだろう。

マッサのファンクラブのようなものが、日本のmixiで立ち上がって活動しており、昨年の鈴鹿での日本グランプリでは、皆で制作したマッサ応援の横断幕がテレビに映っていた。私は、ただテレビで傍観。

マクラーレンのハミルトンと最終戦最終コーナーまでしのぎを削り、ぎりぎり負けて「幻のチャンピオン」となった二〇〇八年の再現を見たいものである。

マクラーレンの調子が良さそうだが、レッドブルやフェラーリに比べて、明らかに空力面でのアドヴァンテージがあるようである。

これ以上語ると、マニアックな話が止まらなくなるので、頑張っで抑えてみるが、一つ興奮したのは、今年からオープニング・ソングにFSQUAREの「TRUTH」が復活したことである。それにしても、YouTubeというのは、古き良きお宝映像が見つかるという点では、かなりの宝箱である。以下、セナが亡くなった九十四年の懐か

しきF1。

往年のF1ファンにとって、この曲がどういう意味を持つか、名状しがたい。先週末のオーストラリアGPのオープニングでこれが久々に流れたのを聞いて、少し涙してしまった。セナ、プロスト、マンセル、ヒルなどの時代は終わったが、シューマツハはなぜか健在である。

実は、シューマツハのドライビングは、マニアの間でも好き嫌いが分かれ、実際にハミルトンよりも乱暴な時もあるし、幅寄せも多いのは確かである。私は好きなほうだが。ハミルトンは、個人的にマッサばかりに幅寄せするので、勘弁してもらいたいものである。

とは言っても、シューマツハのドライビングでさえ、セナの時代に比べれば、安全運転である。要するに、安全第一志向は、今の世界的な傾向なのだ。

ちなみに、私は幼少期にはいわゆるディスレクシアのような症状があったが、F1ドライバーやマシン・チームの名前、一九八〇・九〇年代の日本車・外車の名前の羅列的暗記によって、カタカナという文字体系を覚えた。

そのため、今でも例えば、その年代の日本車なら、ヘッドライトの形状を見ると車名が分かる。中には、ライトの破片だけで分かる車もあるし、エンジン音を聞いて分かる車もある。交通事故に遭ったら、加害車両を警察よりも早く特定できると自信を持っているのだが、全くそんな目には遭いたくないものである。

それぞれの車には表情があり、どの車のどのヘッドライトの破片

の形状がどのように笑っているか、泣いているかを見て、頭の中で車名に変換することで、分かるわけである。これは、小さい頃に親や教師にも訴えたことであった。懐かしい限りである。

フジテレビは、昨年、とある俳優のツイッター発言をきっかけとして、韓流番組を多く流していることが問題視されて、デモまで起こされたが、多分、F1ファンだけを取り出してみたら、今年はそのような騒動はあり得ない一年だろうといったところである。今年から、F1はBSだけで、地上波では放映しなくなったが、などと、随分手を動かしてブログを書いってしまった。

第三編 三十歳〜三十九歳

『六方将棋解説』

ろっぼうしようぎかいせつ

二〇一二年五月二十六日 起筆

二〇一三年一月二十八日 改訂

二〇一三年二月八日 改訂

二〇一三年二月十五日 摺筆、公開

●最初は六人〓六方士(ろっぼうし)がそれぞれ、王将(玉将)、飛

車、角行、金将、銀将、桂馬、香車、後駆（しんがり・しりがり）、歩兵を一枚ずつ持つ。

●最も腕のある者が天王将（てんおうしよう、略して天王）を用い、天士（てんし）と呼ばれる。残る五人が地玉（ちぎよく）、東玉（とうぎよく）、西玉（さいぎよく）、南玉（なんぎよく）、北玉（ほくぎよく）を用い、同様に地士、東士などと呼ばれる。

●天士の持ち駒を天駒（てんごま）と呼び、地駒（ちごま）以下同様に呼ぶ。

●後駆は玉と同じ動きであるが、玉と同じ段から玉の後ろ六段以内になければならない。

●駒は、一面二十五マスのうち中央の九マスに並べる。天駒は南向きである必要はなく、東西南北のいずれと対峙しても良い。

●初めに天王がいる面（天士の自面）を天面、天面中央の天士の自陣九マスを天陣と呼び、地面（ちめん）・地陣以下同様に呼ぶ。

●金と銀のマスを除く七マス（自陣は除く）⇨成陣（なりじん）に駒が入りする時、本将棋同様に「成る」ことができる。

●各面の銀将のマスの右上から順に、本将棋同様にマスを数えるが、本将棋のマスの頭に「天地東西南北」のいずれかを付して、「天3四」などとする。

●全ての駒は、直進方向（駒の頭の方向）にある四面⇨腹面（はらめん）に進む（打つ）ことができるが、隣り合う二面⇨脇面（わきめん）に進む（打つ）ことはできない。例えば、図の南駒は、東面と西面に進む（打つ）ことはできない。

●ある駒は、その駒のいる面⇨陽面（ようめん）にいる敵駒と、その面に隣り合う四面⇨腰面（こしめん）の敵駒から攻撃を受ける。

ただし、対面⇨陰面（いんめん）の敵駒からは攻撃を受けない。（駒に利きがない。）駒が自面にいる時、隣り合う四面を特に自腰面（じごしめん）と呼ぶ。

●腹面にいる敵駒と、腹面に左右から進入してきた敵駒を取ることができ、また、腹面に限り、本将棋同様に取った駒を打つことができる。

●各士はまず、自面の次の腹面にいる玉、すなわち、真正面に対峙している玉⇨対玉（たいぎよく）を詰ませることに専念する。対玉の持ち主を対士、それ以外の敵を敵士と呼ぶ。

●対玉を詰ませた場合、対玉を含む対駒を全て自分の持ち駒とすることができ、この時、対玉を盤面から取り除き、それ以外の対駒をそのマスで逆向きに並べ替える。これをまとめて一手とする。

●対玉を詰ませた者は、残る敵玉が腹面にいる場合、詰ませることができる。詰んだ場合、この敵士の対士が勝者として生き残るが、この敵士の持ち駒は詰ませた者の持ち駒となる。

●初戦三戦の最初の勝者⇨頂士（ちようし）を含む計三士の生き残り⇨生士（いきし）が決まったところで、頂士以外の二士⇨次士（じし）は、頂士の腹面と自身の腹面を兼ねる面の任意のマスに自玉を置き直す。その他の駒の位置は、そのままとする。この二玉は頂士の腹面を出ることができない。

●次士の一方が天王に詰まされると、最後に、頂士と残った次士⇨

残士(ざんし)とで争う。

●最後まで自玉の詰まなかった方が勝者となる。

●「二歩」や「打ち歩詰め」などの本将棋の禁則は、六方将棋でも適用される。

二〇一四年のF1のレギュレーション変更

二〇一三年十月十日 起筆、攔筆、公開

「来季F1はあまり楽しくなさそう」とドライバー(オートスポーツ web)

<http://headlines.yahoo.co.jp/hl?a=20131018-00000009-rcg-moto>

来季のV6ターボエンジンは、すでに何チームかがその姿や音を公開していますが、ファンの間では「芝刈り機か掃除機の音みたい」という意見が多いようで、レギュレーションに従わなければならないドライバーやメカニック、エンジニアたちがかわいそうになります。

確かに、我が最良ドライバーのマッサが言うとおり、ドライビングも今季ほど楽しくないかもしれないですし、逆にもでもないかもしれませんが、ダウンフォースとグリップが低下し、エンジンパ

ワーの比重が大きくなる分、さすがのエイドリアン・ニューウェイ(レッドブル)もうまく対応できるのか、どういうマシンを作ってくるのか、ベッテルの五連覇はあるのか、という点には注目したいですね。

当のマッサは、F1では、ザウバー、そしてフェラーリと、フェラーリエンジン搭載マシンにしか乗ったことがない、実は稀有なドライバーですが、来季はどこに行くのでしょうか。

今季のえげつないF1も終了

二〇一三年十一月二十九日 起筆、攔筆、公開

今季のF1も終了。今季で引退のウェバーの最後の走りが感動的だった。我が最良ドライバーのマッサは、来季はウィリアムズから参戦。

マッサは、ハミルトンとチャンピオン争いをした二〇〇八年に自分よりもポイントが下位であったライコネンにフェラーリのシートを奪われる形になるので、どういう心境だろうと思ったが、そこはさすが、「まさかのマッサさん」らしく気丈に振る舞っているようで、自分のことはともかく、カネでシートを買うペイドドライバーたちを「売春婦」と発言。最後までマッサらしいマッサであった。(全世界のF1ファンから、「それを言うなら買春じゃないのか?」とまっ

とうなツツコミを入れられていたのが面白かった。)

ウェバーもペイドライバーが大嫌いなドライバーの一人だったが、どうやら私がマツサやウェバーを好きなのは、そういう「風変わりな性格への興味」から来ているようだ。特にウェバーは、マルドナードとグロージャンが嫌いだったようだが、最近はこの二人の走りもよくなってきた。

マルドナードとグロージャンは少し前まで、他のマシンに容赦なく激突する二大巨頭ドライバーで、マルドナードはレース中によく激突し、日本のF1ファンからは「師匠」と呼ばれ、グロージャンはスタート直後によく激突し、日本のF1ファンからは「グロージャンミサイル」、ウェバーからは「一周目の狂人」と呼ばれていた。

全くニュアンスは異なるのだが、F1界の悪い意味でのえげつない言葉と言えば、インドGPで、トラックサイド・オペレーションズ・ディレクターのパーマインがライコネンに対し、ライコネンのすぐ後ろをライコネンよりも速く走っていた同じチーム(ロータス)のグロージャンに順位を譲れと指示する時に、「F●cking」を使った暴言を吐いたのが、記憶に新しい。「おい、どけよ、クソ!!!」という発言だった。

個人的には、いくら激しい競争を繰り広げるモータースポーツだからと言って、こういう発言は無いに越したことはないと思う。アイスマン(寡黙な男)であるはずのライコネンが、さすがに頭にきて同じ単語を入れて反撃したのも、ある意味仕方がないことだったと思う。

歴史的にF1は、サッカーやゴルフやラグビーなどと同じで、それなりの貴族的な規範・マナーというものに立脚しているし、少なくとも選手であるドライバーに対する言動として、やってはいけない言動というものがあると思う。

とここまで書いて、今季のチャンピオンで、毎年自分のマシンに女性の名前ばかり付けて自画自賛しているベッテルを思い出したが、来季はベッテルの圧倒的な優位がどこまで続くのか、収まるのか、それとも逆転されるのか、楽しみである。アロンソが「昔かたぎのドライバー」と賞賛したウェバーは、この若きチームメイトに四年連続でチャンピオンを持って行かれたのである。

ところで、マシンにEVを用いるFormula Eは、全戦がテレビ朝日で生中継されることになったらしい。これは嬉しい。もちろん、放映権もカネ・ビジネスで決まるのだとは思いますが・・・。

F1新カーナンバー発表!

二〇一四年一月十一日 起筆、攔筆、公開

フランスはメリベルのスキー場でのミハエル・シューマッハの大怪我と共に年末年始を迎えたF1界限。依然として重体の状況であり、現在はあえて低体温にして脳活動を低下させているというニュースもあった。ファンとしては、静かに見守る以外にない。

そんな中、今季からドライバーが自分の好みで付けられるようになったパーマネットナンバーが発表された。F1関連ニュースでも「カーナンバー」としてあるところが多いので、この記事のタイトルにもそう書いたが、そのシーズンのF1マシンに与えられるナンバーではなく、実際は（というよりヨーロッパ現地では）、ニュアンスとしては「ドライバーのパーマネットナンバー」といったところだ。そのドライバーが乗っているF1マシンに付くナンバーという意味では、「カーナンバー」ではあるが。

我が最員のマツさんは19という素数をお選びになったようである。しかし、今季こそ、今までの何だか「割り切れない」成績を脱して、よい成績を残してほしいものである。今のウイリアムズはドン底なので、今度こそ這い上がれるに決まっていると信じていたい。

以下、各ドライバーのカーナンバー。

二〇一四年F1エントリーリスト（二〇一三年コンストラクターズランキング順）

1. セバスチャン ベッテル（レッドブル）※チャンピオンでないときは「5」
3. ダニエル リカルド（レッドブル）
6. ニコ ロズベルグ（メルセデス）
44. ルイス ハミルトン（メルセデス）
7. キミライコネン（フェラーリ）
14. フェルナンド アロンソ（フェラーリ）

8. ロマン グロージャン（ロータス）
13. パストール マルドナード（ロータス）
20. ケビン マグヌッセン（マクラーレン）
22. ジェンソン バトン（マクラーレン）
11. セルジオ ペレス（フォースインディア）
27. ニコ ヒュルケンベルグ（フォースインディア）
21. エステバン グティエレス（ザウバー）
99. エイドリアン スーティル（ザウバー）
25. ジャン・エリック ベルニュ（トロロツソ）
26. ダニール クビアト（トロロツソ）
19. フェリペ マッサ（ウイリアムズ）
77. バルテリ ボッタス（ウイリアムズ）
4. マックス チルトン（マルシャ）
17. ジュール ビアンキ（マルシャ）
9. マーカス エリクソン（ケーターハム）
10. 小林可夢偉（ケーターハム）

音速のヒーロー、ミハエル・シューマッハ

二〇一四年一月十九日 起筆、擱筆、公開

相変わらず意図的な昏睡状態に置かれているシューマッハだが、

生涯にわたってこの状態を続けることになるか、または意識が戻らない可能性もあるとのニュースが飛び交っている。

基本的にF1の話題は第三ブログに書いているが、今日はこちらに書く。

幼い頃にカタカナを当時の国産車（ブルーバードやカローラやランサーなど）の名前から記憶し、小学生の頃には周りの友人たちがファミコンやCリーグに没頭する空気についていけず、自由帳に自作のコースレイアウトや迷路ばかり書いて遊んでいた私にとって、自動車レースは少年としての私の心を揺さぶる最高のスポーツであり、その最たるヒーローがミハエル・シューマッハだった。

アイルトン・セナが死んだのは私が小学生のときであり、F1のレギュレーションやルールを理解して観戦するようになったのは、ミハエルの時代からなのである。

マシンで体当たりする癖があったり、時々進路妨害したりと、現役時代は色々と言われてきたけれども、やはり今なおベッテルの記録をも簡単には寄せ付けない歴代最強のこのレーサーの回復を、心底祈るばかりである。

今季F1が開幕し、可夢偉がマッサに激突・・・

二〇一四年三月十八日 起筆、擱筆、公開

小林可夢偉が我が鼻肩ドライバーのマッサに激突という、何ともゆゆしき皮肉な事態で始まった今季のF1。

当初はマッサもファンも可夢偉を批判していたが、可夢偉のせいではなく、マシントラブルのせいだったということで、可夢偉がファンに反論する事態となっている。

それにしても、同じ激突を演じたところで、「あいつならやりかねない。きっとドライバーのせいだ」となるか、「あいつがミスするわけがない。きっとマシントラブルだ」となるかは、残念ながらこれまでのドライビングで決まるわけで、「可夢偉のことだから、マシントラブルに違いない」と最初からファンに言わせるくらいの走りを期待している！

実際に、一昨年までのグロージャンやマルドナードも、ミスでない時まで、「あいつのことだから、ドライビングミスだろう」と言われていたのだった。結局、そんなことで評判は決まるのであった・・・。我が鼻肩ドライバーのマッサは、こうして激怒のゼロポイントで今季をスタートしたわけだが、仕方がない。

【参考】

マッサ「小林に追突され表彰台の可能性を失った」…ウイリアムズ日曜コメント

http://as.web.jp/news/info.php?c_id=1&no=55153



小林可夢偉、世界中のファンに反論「どうやって止めるの？」

[http://headlines.yahoo.co.jp/hl?a=](http://headlines.yahoo.co.jp/hl?a=20140721-0104000000-f1v-moto) 二〇一四年七月二十二日 起筆、攔筆、公開

0318-00000000-f1v-moto

フェリペ・マッサの不調の原因を考える

二〇一四年七月二十二日 起筆、攔筆、公開

我が鼻肩F1ドライバーのフェリペ・マッサの話です。

カナダGPでペレスと接触しタイヤバリアに激突してリタイア、前回のイギリスGPで単独事故を起こしたライコネンに激突されてリタイア、一昨日のドイツGPでもマグヌッセンと激突しマシンが一回転してリタイア・・・。

さすがに十年以上もマッサのファンをやっていると、二〇〇九年ハンガリーGPでの瀕死の事故以降の運命が違いすぎるので、疫病神でも憑いているのではないかとさえ思えてきます。地元ブラジルのファンや世界中のファンも言っていますが、「誇れるのはファン歴の長さくらいで、不運な事故の数は誇れないね」といったところです。

F1とW杯の両方を見ていたブラジルのファンは、「疫病神がナイマールに移ったかと思ったら、直後にやっぱりマッサに戻ってきた」と意気消沈のようです。あちらでは、もっと過激なニュアンス（「呪い」などのニュアンス）で言っているのかもしれないですが・・・。

そして、そんなマッサ自身が、精神的に参ってしまったてセラピーに通っていたくらいなので、ファンが丸となって疫病神を退治するしかなさそうです。マッサ自身は、イタリア移民の子孫ですし、根っからのブラジルのノリをやっている姿は見たことはないですね。しかし、バリチェロと共に大変な愛国者ですけれど。

日本だと、フェラーリ時代からそうですが、アロンソやライコネンのファンが多いし、私も同僚など周りにF1ファンがいなくて寂しいので、ここは特にブラジルのファンにサンバの勢いで疫病神を

吹き飛ばしてほしいところですよ。

さて、マッサの事故多発の原因としては、圧倒的に「疫病神が憑いている」としか思えない不運」、つまりは他のマシンやマシンのパートナーが勝手にマッサ目がけて飛んできてマッサのマシンやヘルメットに激突、というパターンが多いわけですが、そうでない点を探せないわけではないと思っています。

やはり十年間見てきて変わっていないと思うマッサの特徴は、ライン取りのラフさと相手マシンの動きへの過信ですね。

まずライン取りのラフさについて。フェラーリ時代のチームメイトとの比較が一番分かりやすかったのですが、アロンソやライコネンはコースをタイトなレーシングライン（理論上の最速ライン）で走りしようとする一方で、マッサはライン取りが相当にラフだというのは感じます。

特に、コーナーのエイペックスをきっちり通らないという癖がある気がします。ただし、縁石の状態が悪い（縁石が高かったりデコボコだったりする）サーキットでは、ハードタイヤでタイトなライン取りをしすぎた場合、縁石に乗ってジャンプした分だけグリップが消えるので、こういうときは、多少エイペックスを大回りする分だけタイヤを痛めつけないで済むマッサがアロンソやライコネンよりも速いタイムを出しています。

しかし、マッサのようなドライビングスタイルは、マッサに都合のよい条件がそろったサーキットでしか通用しないことになります。マッサが極端に得意なサーキットは、バーレーン、イスタンブール、

インテルラゴス、マニクール、モナコ、バレンシア、シンガポールなどだと言えます。こういった、コーナーのエイペックスを通らなくてもラップタイムへの影響が小さいサーキット（ストレートとコーナーの配置がマッサ好み）か、縁石があまりない市街地サーキットで好成績を出しています。

そして、これまでの優勝の全てと最速ラップタイムのほとんどを、ブリジストンタイヤで記録していますから、タイヤについても自分のスタイルにピッタリと嵌っていない限り、速く走っていないわけです。

ちなみに、反時計回りのサーキット（イスタンブール、インテルラゴスなど）で速く、特にポールポジションが多い、という特徴もあります。これは体の左右の違いから来る癖のようなものだと思います。当然、反時計回りのサーキットでは、左コーナーが多くなるので、左コーナーでの走りがうまいということでしょう。

例えば、バトンのようなタイプのドライバーは、各サーキットでの臨機応変な対応がうまいわけです。基本的にバトンは、アンダーステア気味のマシンを好みますが、マクラーレンに入ってからには、タイトに通った方がよいと思うコーナーは、きつちりとハミルトン並みにタイトなラインを通っていますし、タイヤにもそれ相應のデグラデーションを引き起こしています。

マッサの場合は、上記の「縁石の状態や、ストレートとコーナーの組み合わせがマッサにとって都合がよいこと」、「できれば左回りサーキットであること」、「自分好みのタイヤであること」（ブリジス

トンタイヤ」の条件のどれかが外れると、途端に遅くなります。

それから、相手マシンの動きへの過信。冒頭に挙げた事故だけを見ても、ペレスとの接触とマグヌッセンとの接触に関しては、マッサでなかったら起きていなかった事故である可能性もあると思います。マッサのライン取りが中途半端すぎるために起きた事故でもあると思います。

マッサは、ペレスやマグヌッセンなどの若手よりはミラーをきちんとして見ているのだから、ほんの瞬時の判断で、マシンの脇を締めるか相手のマシンの分だけ空けるか、どちらかにしないと、またノーズを突っ込まれるだけだと思います。

そういうわけで、「マッサが不調」と言うよりは、「これがマッサの元々のドライビングスタイル」と言ったほうがよいのかもしれない。やはり、「マッサはマッサ」のようです。

などと色々書いたものの、結局はこれからも筋金入りのマッサファンであることは変わらないだろうと思う私でした。

それにしても、F1とW杯を比べてみて不思議に思うのですが、F1ではブラジルのファンの暴動は聞いたことがないですね。ピケのクラッシュゲートのときも、暴動らしきものは起きませんでした。どうしてサッカーばかりが、あんなに血なまぐさいのでしょうか。ネイマールに怪我をさせたコロンビアのスニガに対しては、殺害予告の文句がネット上でも踊っていますが、本当にやめてほしいです。

【画像出典】

フェリペ・マッサ (Wikipedia)

[https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%95%E3%83%9A%E3%83%BB%E3%83%9E%E3%83%83%E3%82%B5](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%95%E3%82%A7%E3%83%AA%E3%83%9A%E3%83%BB%E3%83%9E%E3%83%83%E3%82%B5)

テニスの話(錦織圭選手の準優勝、グリップやフォームの話など)

二〇一四年九月九日 起筆、攔筆、公開

私は球技と言えばテニスしかできないというくらい、テニスばかりやっていました。日本人で四大大会の決勝に行ける選手が現れるとは思っていません。素晴らしいです。当時(中高大時代)は、サンプルスやアガシの全盛期で、私はサンプルスが好きでしたし、周囲との会話でも大抵のテニスの話は最初はサンプルスの話題、その次にマイケル・チャンやラフターやクエルテン、その次にやっと松岡修造の話題が出るという状況だったので、たったの十年で時代は変わるものだなと思いました。

そうは言っても、判官鼻根の私は、偶然街で見かけた鈴木貴男選手に思い切つて声をかけ、テニスをやっついて鈴木選手にも憧れていることを伝え、サインをもらったことがあります(気さくな人でした)、

それ以来、松岡修造だけでなく、それ以外の努力型の日本人選手の活躍ももつと追うようになってしまったのです。

今となつては、松岡修造は、テニスとは全然関係ないプラス思考の叫びで、お茶の間で人気ですが。叫びを聞いた後で、サンプラスから一セットを奪取した伝説の熱戦の映像を見ると、ギャップに笑いますが、今の活動はこれはこれで良いと思います。

世代は変わって、ヒューイットやロディック、そしてフェデラー、ナダル、ジョコビッチ、マレーなどの時代になっていくわけですが、そこにマイケル・チャンコーチと錦織圭という身長の高い東洋人ペアが加わったことは大きいですね。

さて、テニスの技術的なことでも色々と思ひ出しますが、十年前までは、まだウエスタン・グリップやオープンスタンスを嫌う風潮が（特に日本で根強く）残っていたし、私の高校でも「ウエスタンで握るヤツはダメ。オープンスタンスもダメ。」という主義でグリップやフォームを矯正させようとするコーチがいたわけです。私も、「徐々にイースタンに戻せ」と言われてきた世代です。当時のコーチ陣は、全員がイースタングリップでクロースドでした。

しかし、世界では、サンプラスどころか、マッケンローやベッカーの時代から、ウエスタンやオープンスタンス全盛になっていく気配はあったわけですからね。私も結局、グリップもフォームも変えませんでした。

私などは、かなり厚いウエスタン（エクストリームウエスタングリップ）かつオープンスタンスで、基本的にサーブ（ほぼ全部がト

ップスピンスリーブ）の直後に次のワンストローク（レシーブのリターン）を打つ前にグリップを変える（つまり、イースタンまたはコンチネンタルからエクストリームウエスタンに持ち変える）人なので、ストロークの際に、リーチが短くなる代わりに打点を前にしてトップスピンスさせる、というタイプです。

だから、大まかに見て、私のようなグリップとフォームは、サンプラスの時代に一番近いですが、それ以来、「ウエスタン化」の勢いは多少は鈍化しており、錦織圭選手をはじめ今の時代のグリップは、サンプラス時代と比べても極端なウエスタンというわけではないですね。

それでも、トップスピンスリーブを打った面の裏面で直後のフォアハンドやほとんどのフォアハンドを打つケースは増えているので（サーブのリリースをそのまま自然に次のストロークに使えるので、私もしばしばやっていた）、今でもウエスタン化が進んでいるとは言えそうです。

（イースタングリップやセミウエスタンの人は、ほぼ100%と言っていいほど、サーブとフォアを打つ面が同じで、バックを打つ面だけが違います。）

もちろん、錦織やナダルがエクストリームウエスタン気味の厚いグリップである一方、フェデラーはセミウエスタン気味の薄いグリップであるなど、個人差はありますが。

昨今は、そういったグリップやフォームの問題よりも、サーフェス（芝生、ハード、クレイ）の得手不得手のほうが問題になる時代

なのかもしれません。サンプラスもクレイが苦手ではありませんでしたが、全仏（クレイ）でナダルにほとんど勝てないフェデラーやジョコビッチのような苦手意識というほどではなかった気がします。

グリップやフォームの革新的な変化は、今後テニスではあまり起こらないのではないかと思います。単なる個人的な見解なので、また十年経てばどんなことになっているかは分かりません。

そういえば、突然話は変わりますが、テニスと言えば、どうして「大学生の男女交遊・飲みサークル」の表看板に「テニスサークル（テニサー）」が使われるのでしょうか。大学のサークルで、バレーボールやサッカーのサークルでふざけたものはあまり見たことがないですが、テニスサークルはふざけたものが多い印象です。

実態はまさに「男女交遊・飲みサークル」で、ラケットもボールも持っていないが、テニスコートに行く代わりに酒場に行くサークルもありますね。十年前でさえ、東大男子と東大女子しか入れない東大のテニスサークルは四つだけで、私はその一つに入っていたのですが、それ以外の何十とあるテニスサークルは、「東大男子と他の女子大生」というものばかりでした。それを同じように大学が公認しているのですから、実にふざけた話ですね。

これだけ「一気飲みで学生が死亡」のニュースが流れているのに、まだ一気飲みをやめようと思わないのは、学生にもなって全くニュースを見ていないか、いじめ自殺とはまた別種の自殺願望・希死念慮があるのだと見なして、大学側もそういう学生とその親を見放せばよいと思います。

つい先日、明大と日本女子大のインカレテニスサークルメンバーらが新宿の路上で集団昏倒していたのがニュースで報道されました。誠に恥ずかしいですね。「テニスを」やっていた人なら分かつと思えますが、ラケットへの愛着やガットの網目を指で直す感覚などは、人生の宝物であるわけで、ふざけた男女がラケットを無駄に使う、あとは放置しているかと思うと、実に憤りを感じますね。大学側もこういうふざけたサークルはどんどんつぶしていくべきだと思います。

こういったサークルで遊びほうけている男女と、今回の錦織圭選手とを比べてみれば、どちらが技術面でも精神面でも将来性のある若者であるかは一目瞭然ですね。

最後は余計な話になりましたが、ともかく錦織圭選手の活躍を見て、祝福の気持ちが湧いてきたとともに、自分のテニスの青春を思い出しました。

電動フォーミュラカーレースシリーズ「Formula E」が開幕!!

二〇一四年九月十三日 起筆、攔筆、公開



いよいよ二年前から楽しみに待っていた史上初の電気自動車フォーミュラカーシリーズ「Formula E」（略称は「FE」）が開幕した。準備期間中だったここ二年間、F1ファンの間でも、F2やGP2やスーパーフォーミュラの新設の時の空気とは全く違って、「主催者・FE側がうまくやれば、ひよっとしたらF1の人気を超えるかもしれない」、「F1からFEに“乗り換え”ようかな」という声があつたくらいで、私も何となくそういう衝動を感じてF1もFEも同じくらい追いかけていたが、今日の開幕戦を先ほど見てみたら、

やはり面白い。というわけで、相当予定通りに、これからの将来は（と言うよりこれからの近未来は？）F1とFEの二刀流ファンで行くつもりである。

いきなり開幕戦から、最終コーナーで激突され空中でのマシン一回転の憂き目に遭ったハイドフェルドが、激突したニコラ・プロストに怒っていたが、F1を半ば追い出された後でこういう夢中になれる新天地が待っていたのは、才能のあるハイドフェルドとしてはよかつたのではないかと思う。

FEは、半分は「F1のOBレース」のようなものだし（10チーム全てから元F1ドライバーが出走。ただし、ドライバーの年齢はF1と同程度に若い）、往年のF1ファンならドライバー名やチーム名を覚える苦労なんてももなく、むしろF1を理不尽な形で（スポンサー・金の問題やクラッシュゲート事件などで）追い出された、ハングリー精神のあるドライバーが多いので、そういうところでもFEが面白く感じられるのかもしれない。

F1はF1でこれからも見ようとは思いますが、チームでポチ犬のように扱われクラッシュゲート事件に巻き込まれたピケ J. などには、特に頑張つて欲しい。デイ・グラッシ、ブエミ、ダンブロシオ、アルゲルスアリ、ブルーノ・セナなどもそうだが、政治と金にまみれたF1に戻るよりも、FEのほうが似合っているのではないかと思う。

ドライバーだけでなく、チームの実質的オーナーとしても、トゥルーリ、アンドレッティ、アグリと懐かしいF1ドライバーの名前

が並ぶ。トゥルーリは兼ドライバーでもある。フォーミュラカーとほとんど縁のないアウディがアプトにどこまで関わるのかにも注目である。

FEは、アジアや旧共産・社会主義国を転戦するようになってもおお「欧州貴族文化的・政治的な」空気の強いF1とは違い、アメリカのインディーカーのような自由なガチンコ勝負要素（ストリートコース、順位の入れ替わり、女性ドライバー）といった要素も含まれているので、そういう点も面白い。

トゥルーリやハイドフェルドやフランク・モンタニーなどの円熟したF1のベテランOB陣や、オリオール・セルビアや佐藤琢磨のようなCART・インディ経験者の活躍も楽しみである。セナ（アイルトン）やプロスト（アラン）やピケ（ネルソン）といった懐かしい名前も、甥のブルーノ・セナや、息子のニコラ・プロストやネルソン・ピケ Jr.で聞くことができ嬉しい。

あとは、レース数の問題、コストの問題、音（迫力）の問題などがどう片付いていくかだと思う。それにしても、そもそも騒音問題がないEVカーだからこそ、街のと真ん中でレースができるわけで、これでまた、音を出すためにコストと電気を使い車体を重くするなどして環境を汚し、FEがF1化したら、元の木阿弥だし、フォーミュラカーレース史をきちんとまじめに追いかけているファンなら、そんなところで文句は付けないと思うのだが、どうなのだろうか。

爆音・音速・ガソリンエンジンですっ飛ばすセナ・プロスト・シューマッハの姿は、あれはあれで崇高な過去の歴史。FEはFEで、

別の形で孤高でなければならぬ。私の一ファンとしての思いはそんなところである。

【画像出典】

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%95%E3%82%A9%E3%BC%E3%83%9F%E3%83%A5%E3%83%A9E>

ビアンキの無事を祈り、チェザリスの死を悼む

二〇一四年十月六日 起筆、攔筆、公開

昨日のF1日本GPで、単独コースアウトしたザウバーのエイドリアン・ステイルのマシンの撤去作業中だった重機（おそらくクレーン車）に、マルシャのジュール・ビアンキが激突した事故について。

国際映像ではビアンキの事故の瞬間が映ることはなく、ステイルのスピントビアンキの事故後の映像しか流れなかったが、FIAが事故映像の使用を禁止したということかもしれない。

当初のテレビでの放映では、ビアンキが事故を起こし緊急搬送されたという、お知らせ程度のコメントしか聞かれなかったが、海外のテレビ局やF1雑誌からの情報を含む続報によれば、どうやら重機の下にビアンキのマシンが滑り込んだらしい。

最初はドクターヘリで緊急搬送という情報だったが、結局は視界不良でヘリが飛べず、救急車で三重県立総合医療センターに搬送されたようだ。

日本での情報はそこまでだし、まだまだ情報は錯綜しているが、海外ではもう少し詳しいめのニュースがあるようだ。以下のサイトにも写真が載っている。自身もコースアウトしたばかりのドライバーがビアンキの救出作業を見守る姿や、二〇〇九年のハンガリーGPで瀕死の怪我を負ったマッサが心配する姿が印象的だ。

<http://www.dailymail.co.uk/news/article-2781081/BREAKING-N-EWS-Formula-1-star-seriously-injured-crashing-tractor-race-hit-heavy-rain.html>

ドイツの「Auto Motor und Sport」誌は、ビアンキのマシンが激突した衝撃で、すでに釣り上げられていたスーティルのマシンが落下したと報じている模様である。

事故を防止できなかった原因については色々な意見があり、「スーティルがクラッシュした段階でセーフティカーを出すべきだったのではないか」、「レッドフラッグ（レース中断）にしてから重機を入れるべきだったのではないか」、「大雨が来ることが分かっていたのだから、レース開始を早めて周回数を少なく終わり、ハーフポイントにすればよかったのではないか」といったものがあつた。

鈴鹿サーキット側の責任を問う声もあつたが、レース続行の可否

の判断は、おそらくサーキット側とはほとんど関係がなく、FIAから派遣されたレースディレクター（永久スターターのチャーリー・ホワイティングが就任）やスチュワードなどが担う上、実際はタイヤもエクストリームムエザーよりもインターミディエイトで十分な時間帯が多く、過去の雨天のレースと比べても十分にレースができるレベルの雨量だったので、本当にレースを中断すべきかどうか判断が難しかっただろうし、サーキット自体や重機・救急車両・ドクターヘリの配備などにも問題はなかったと思う。

ただし、元F1ドライバーのオリビエ・パニスの以下の意見は参考になると思う。

「セーフティカーを出動させるか赤旗でレースを止めない限り、トラクターの類はコースに入れないようにするんだ」

「私が懸念するのは、コース上の（各車両）だ。向こうは背が高すぎるし、こっちは地面に寝そべるように座っているんだ」

【引用元】

<http://www.topnews.jp/> 二〇一四/10/07/news/1/races/japanese-gp/117837.html#sthash.nKn9EKnb.dpuf

私も、直接の原因は、雨天ではなく、F1マシンと重機の構造・車高の差だと思う。F1マシンがこういった重機の下に滑り込むと、ドライバーの頭がちょうど重機の下方にヒットする位置関係になつてしまっている。

いずれにしても、不運な事故と言うしかない状況に見えた。

それから、同じく昨日、アンドレア・デ・チェザリスが事故死した。高速道路を日本製の大型オートバイで走行中の事故死とのこと、日本にまつわるF1の不運・不幸が重なって何だか気分が重い。今は、三重県立総合医療センターの医療技術を信じて、ビアンキの無事を祈るしかない。

ジュール・ビアンキの事故についての続報

二〇一四年十月七日 起筆、攔筆、公開

昨日の記事の続き。まだまだ情報は錯綜しているが、いくつか続報もあったし、映像もYouTubeなどで出回ったので、随分まとまってきたようだ。

現地で日本の観客が撮影したと見られる事故の瞬間映像とその後
の救急搬送（搬送開始からサーキット外での搬送中を含む）の映像
がYouTubeにいくつか上がっていた。

（動画の紹介記事を本記事の下方にリンク）

クレーン車の下にビアンキのマシンが滑り込んだという続報が本日もあったが、事故の瞬間映像を見たところ、それが確認できた。まずフロントウイング・ノーズ部分が滑り込み、クレーン車の後部が跳ね上がり、その衝撃でステイルのマシンが落下していた。ビアンキの頭部がクレーン車に直撃した可能性があるようだ。

事故映像の公開については、やはりFIA（レースディレクターのチャーリー・ホワイティング）・FOMからの公開禁止指示があったとのことである。

救出作業と救急搬送の映像も見てみたが、コースマーシャルたちが状況を把握できていなかったのか、最初はどうも動きが遅いように見えたし、救急車の到着にも約八分かかっており、過去の海外でのF1の重大事故の処理と比べても多少遅かったため、あとは日本の医療が全力を注いでビアンキを救ってほしいと思ってしまう。（緊急手術が成功したのかどうかについての真実味のあるニュースはまだないようだ。）

昨日も、鈴鹿サーキット側には過失がないのではないかと書いたし、基本的にレギュレーション上もそうであると言える上、以下の記事にもあるように、鈴鹿のマーシャルは世界的評価も高い。鈴鹿のマーシャルの皆さんは、今回の事故に懲りずに仕事に誇りを持っているといいと思う。

マーシャルとは？ F1用語集

<http://formula1-data.com/F1-database/F1-ma/marshal.html>

そしてさらに、競技委員のミカ・サロらによる新たな見解として、事故当時はイエローフラッグが出ていたにもかかわらず、ビアンキが他のマシンよりも高速で走行していたことから、ビアンキがイエローフラッグを見落としていた可能性があるという見解も出ている。

ビアンキの事故を受け、F1日本GPの運営判断に割れる意見
<http://www.topnews.jp/11010/10/07/news/F1/117866.html>

事故が起きたコーナーと、その一つ手前の右コーナーは、高速で走るドライバーには逆バンクに感じられる（実際はバンクは付いていない）コーナーだし、特に事故が起きたコーナーは上ってすぐの下るブラインドコーナーでもあるから、ウェット状態ではトラクションがかからず、魔のコーナーになるおそれもあると思う。

さて、観客が私的に撮影した映像の中で、公式なニュースで言及・リンクされたものを以下に挙げておく。

【動画】 ジュール・ビアンキ、クラッシュの瞬間 ※閲覧注意 ←
すでに削除されている

http://F1.gate.com/bianchi/F1_25235.html

今現在、観客によって私的に撮影されたと見られる映像は、ほとんど削除されている模様だ。

以下の記事は、同じ映像を紹介しつつ、グリーンフラッグを問題視する内容になっているが、このグリーンフラッグは「この場所以降はグリーンフラッグ（イエローフラッグ解除）、この場所よりも手前ではイエロー」という意味なので、問題はないと思う。

【動画】ビアンキの事故の模様。疑問視されるグリーンフラッグ ←
上掲の動画と同じ動画が復活
<http://headlines.yahoo.co.jp/hl?a=11080000001-fliv-moto>

それにしても、観客が自分のビデオカメラなどで私的に撮影した動画までもが (FOM) Formula One Management の削除要請を受けているとすれば、やはり少々納得がいかないと感じる。テレビの国際映像を勝手に複製して YouTube でばらまいている著作権法違反者と、私的な貴重映像を YouTube で配信している F1ファンとで、削除要請や罰則に大きな差を付けてもらわないと困るという気はする。

もちろん、こういう事故映像の場合は、悲惨な映像であるのは確かだし、そんな中でサーキット脇やマシン上の商業広告がきらびやかに映るのが不適切なのは分かっているのだが。上掲の動画が削除されている理由も、グリーンフラッグの問題ではなく、著作権・著作権の問題によるものだと思う。

しかしそうは言っても、東日本大震災の時も、テレビで放映されている映像よりも YouTube で流れている映像のほうが、ずっと臨場感や真実味があり、かつ命についてより深く考えさせられるものが多かったように思う。

将棋三昧の年末年始

二〇一五年一月五日 起筆、擱筆、公開

この年末年始は、一言で言えば将棋三昧の年末年始だった。指すほうもテレビで見ると「三昧」と書くとい日中こればかりやっていたような書き方だが、日本の正月らしい個人的イベントとしては、雑煮を食べるなど以外には、書き初めやカルタ取りなどはせずに将棋くらいしかしていないという意味である。

見るほうでは、タイトル戦（王位戦・王座戦・竜王戦）やNHK杯の対局の数々、「第40回将棋の日」⁵ 秋田、「新春お好み将棋対局」女流棋士壮絶バトル⁶を見た。

羽生善治四冠が数年に一度の覚醒期に入っている、しばらくは誰もその勢いを止められそうになく、再び五冠か六冠に返り咲くのは間違いないと思うが、そんな中、哲学を専攻する学生でもある糸谷哲郎新竜王の誕生は素晴らしかった。

もちろん、高橋道雄九段が「相手（の森内俊之九段）に失礼だ」と述べた「2三步問題」などのように、やや態度が荒いところも確かに見受けられるものの、そのあたりさえ磨かれれば、より素晴らしい棋士になると思う。竜王戦に限らず、今年度勝率が三割代に落ち込んでスランプに入っているはずの森内九段の貫禄のある姿勢には、成績にかかわらず大きな感動があったし、棋士・人間の格の高さというのは棋力を超えたもの、一種の哲人性・靈性のようなもの

のことを言うのだということは、改めて感じた。

「第40回将棋の日」⁵ 秋田」のリレー将棋では、最後の詰みがあったけなかつた気がしたが、島朗九段の面白い解説が見られたのがよかった。

「新春お好み将棋対局」のトーナメントでは、清水市代女流六段が早々に負けて棋譜読み上げに回っていたのがなかなか不思議な光景だったが、腐らず丁寧に読み上げていて感じがよかった。NHK杯のテレビ解説での姿勢や言動について、間が悪いとか無表情すぎるとか色々言われているが、最近はそこまで悪くないと思う。

（かくいう私も、以前よりNHK杯での清水女流六段の取り方や解説しているプロ棋士への態度に危うさや不安を覚えていて、誰かがすでにネットで言及しているはずだと思っただけで昨年にネット検索したところ、案の定まとめサイトなどを発見した人間である……）

優勝は、フリーで初代LPSA代表理事の中井広恵女流六段。現LPSAからは渡部愛初段も出ていたが、女流棋士の皆さんを見ていつも考えるのは、連盟とLPSAとの微妙な関係のことばかりである。米長会長から谷川会長になっただけでも随分状況が変わると思っただし、実際に一度はいざこざが収束しかけたわけだけれども……

今回も、よくよく見てみればタイトルの通り、連盟の女流棋士LPSAの女流棋士という女性同士の壮絶バトルだったわけだ。こういう仲違いは、一度始まったらなかなか収まらないのが人の世の常ということだと思う。

指すほうは、対面でもネットでも指したので、内容的なバランス

はとれているとは思う。ただ、将棋ばかりしすぎて無駄な疲労が溜まったというか、指し終えてみると、指す意味のない無謀な将棋も多々あった気がしているので、もっと丁寧で有意義な将棋が指せるようになりたいと思う。

対面対戦（特定の知人とのネット対戦を含む）では、自分が駒落ち（上手）で、一枚落ち（飛）、二枚落ち（飛角）、三枚落ち（飛両香）など色々工夫しているが、私の場合、感覚的にも統計的にも飛角落ちよりも飛両香落ちのほうが勝っていない状態だ。つまり、両方の香車がないくらいなら両方の大駒がないほうが勝率がよい。これは、矢倉に組みきらずに（玉を囲いきらずに）中住まい気味にしたままで指す自分の棋風を示していると思う。

ネット将棋の世界は、相変わらずそんじょそこの将棋道場よりもレベルがべらぼうに高く、インフレ状態が続いていて、81道場の段級位は町道場よりも一つか二つ高いくらいだが、将棋倶楽部24では五級〜十級もあれば町道場では余裕で初段・二段認定されるレベルだ。24で七・八級もあれば、職場や学校のクラスや近所では無敵状態と思っただけ間違いない。

私も、最近では24では指していないが、五・六級で負け越していたときでさえ、家族や知人との対面対戦では無敵状態で、先述の駒落ち戦の全てで勝ち越し（というより勝率八〜九割）だった。でも、81道場や24ではコテンパンにされる。どう見てもプロ棋士やアマ高段者の練習場と化していると思えない。

将棋ウォーズでも指したことがあるが、こちらは文化としての将

棋というよりは若者向けゲームとしての将棋を重視した体裁で、「棋神」という自動で五手を指してくれる将棋の神を降ろせる機能があるなど、どうにも将棋に集中できないので、すぐにやめてしまった。しかし、将棋連盟公認であるのは（しかも、金を払えばゲーム内の段級位で公式免許がもらえるのは）、将棋倶楽部24と将棋ウォーズであるという、よく分からないシステムになっていて、81道場は連盟から単に後援されるにとどまっている。

私のもう一つの大きな趣味であるF1でも「金でシートが買える」状況だが、将棋でも「金で段級位が買える」状況なのは残念に思っている。

プロ（四段以上）と奨励会以外のアマチュア段級位・町道場の段級位は、かなりデタラメだと思って間違いない（ある町道場の三級が隣の町道場では二段だったりする）状況なので、それを知らずに喜んで金で免許を買う人以外には何の関係もないかもしれないが、それにしてもいまいよいよ分からないシステムである。

おまけだが、気軽に友達と遊びで将棋を指すなら、SDLN 無料ゲームのサイトがおすすめである。

私はチェスもやるのだが（勝率も将棋とほぼ同じのだが）、自分の感覚に合っているのはやはり将棋の方だとは思っている。でも、チェスも楽しいゲームだし（欧米では、スポーツ扱いでもあり、芸術扱いでもあり、知の頂点扱いでもあるし）、羽生四冠と元チェス世界王者ガルリ・カスパロフ氏との対戦にも大いに感動した。

将棋でもチェスでも、その棋士・人間としての佇まいでも、長年

日本のトップの座を譲らない羽生四冠には敬服するし、糸谷新竜王に挑戦して再び竜王位に返り咲き、永世七冠となられるのを期待してしまふ。

「電王戦×TOYOTAリアル車将棋」の感想

二〇一五年二月八日 起筆、攔筆、公開

Twitterにもすでに感想を書いたが、三時間ほど前にやっと車将棋の中継が終わった。私は中盤後半・終盤入り口あたりから見た。

西武ドームを借り切って巨大将棋盤を設置し、トヨタの新旧の車を駒に見立てて動かすというイベント。巨大な駒が車のルーフに取り付けてある。十時四十五分に対局開始。

対局棋士は羽生善治名人と豊島将之七段。持ち時間は四時間で、切れ負け制。両棋士が指し手を指示するたびにドライバーの皆さんも車も必死に走り回っていたのが大変そうだったが、絵としてはかなり壮観だった。

この「車将棋」は、棋士や将棋愛好家なら一度は思いつきそうなものだし、過去にもどこかで行われたかもしれないが(チェスではすでにこういうイベントがあるようだ)、主催ではないものの日本将棋連盟が関係する公式の試みとしては、初めてだろうと思う。

駒が成るときには、普通はスタッフが走って脚立を持ってきて上

り、巨大駒のボードを剥がし、あらかじめ下に書いてある成り駒の表記を出していたが、なぜか「と金」のときだけは、歩のヴィッツが去って「と金」のヴィッツが控え場所から出てくるという大移動。しかも、直後に「と金」が玉に取られてまた去っていくという、かなり面白い展開だった。

少し残念だったのが、棋士自身は車の巨大駒を見て指していないという点。両棋士が見るそれぞれの盤、サポート棋士の盤、大盤解説の盤、そして車が実際に動き回る巨大ドーム将棋盤は、全て異なるものだった。棋士とスタッフが観客席の対極に座り、車に指示を出すようなスタイルであれば、本当の車将棋になるのかもしれないが、本業である将棋と遊びとしてのイベントの境目が曖昧になるし、羽生名人と豊島七段というブランド性から考えると、そういうスタイルはやや理想的すぎるかとも思った。

最後に初手からの解説があったが、豊島七段の角成りが意図的なのかポカなのかがよく分からなかった。というのが、よくある祭やイベントでの人間将棋は、プロ棋士が指すわけではないし、最初からシナリオ・勝ち負けが決まっていることが多いわけだが、今日はお互いに途中までは真剣勝負で、力が拮抗していたのに、終盤でわざと負けに持っていくような謎の角成りがあり、「イベントであることを踏まえた阿吽の呼吸」と言うにはあまりにも分かりやすい「わざとらしき」だったので、逆に単なる「ポカ」の可能性もあると思う、結局分からなかったわけである。

しかし、それよりも今日の将棋は「車」と「豪華解説陣」をメイ

ンに楽しく見ていたので、棋譜があまり良くなくても気にはならなかった。中でも、糸谷哲郎竜王のまじめなスイーツレボが気に入った。

ポカと言えば、この前の王将戦第二局の郷田九段の最後の一手。やはり、棋士も人間なのだった。

次回はトヨタと日産などで見てみたい。歩はカローラとブルーバードで。と思ったが、持将棋にならない限り、どちらかのメーカーが負けになるわけで、いらぬ事情が発生するため、実現は難しそう

だ。

日産ファンの私としては、旧日産車と新日産車で見てみたい。

「電王戦×TOYOTAリアル車将棋」公式サイト
<http://ex.nicovideo.jp/denou/kurumashogi/>

将棋NHK杯で久々の二歩発生！

二〇一五年三月十日 起筆、擱筆、公開

九日のNHK杯テレビ将棋トーナメントで久々にプロ棋士の二歩を見た。

二歩をしたのは、「羽生さん？ 強いよね！」のモノマネインタビ

ューで有名な橋本崇載八段。先に二歩に気づいて頭を抱えたのは、相手の行方尚史八段。その直後に橋本八段も気づいて頭を抱えた。

映像では、どちらかという于行方八段のほうが目を見開いている様子で、「こんなことで勝って申し訳ない」という表情でさえあった。

プロ棋士も人間なので、二歩、王手放置、角の筋違い、などの反則負けがあるが、アマの私はもちろん一通りしかした。でも、糸谷竜王のように、取った駒をなぜか相手の駒台に置く、一手目で駒を取り二歩連続で指す、などはさすがにやったことはない。

物事を突き詰めて考えすぎると空間の上下左右が分からなくなる。パニック障害や不安障害の方々にはけっこういらつしやるのだが、おそらく糸谷竜王が発生した心境もこれらに似ており、頭を使いすぎて、一瞬、どちらが自分の駒台なのか、今指したのが自分なのか相手なのか本当に分からなくなったのだと思う。

ただしネット将棋では、ほとんどの場合、二歩が打てないなど反則そのものができない仕様になっているから、反則の不安感やスリルはない。

私が指したことのあるネット将棋サイトの中では、「81道場」だけが「反則ができる」仕様で、私も「81道場」では二歩をやらしかたことがある。打った瞬間、「ほわわわーん」という残念なサウンドが鳴るので、なんだか非常に自分が情けなくなる作りだが、それはそれで面白い。

それにしても、今回も橋本八段が「すみません」と謝ったのはすばらしい光景だった。



二〇一五年三月十日 起筆、攔筆、公開

今季F1も開幕間近、Formula Eにも引き続き期待

基本的にプロ棋士もアマも、意図的ではないにせよ、反則をしたら相手に謝罪すべきだと私も思っているし、私もネット将棋で反則をしたときにはチャットで謝った。過去のプロ棋士の反則の映像を見ても、性格による口調の差はあるものの、多くの棋士がすぐに「申し訳ありません」、「失礼しました」と謝っている。

負けを悔しがるより前に、二歩をしてでも相手の駒を不当に攻撃した自分を恥じて謝罪するという姿勢も、将棋という文化が受け継いでいくべき美德だと考えている。

今季のF1もいよいよ開幕間近。

しかし、冒頭のテストからしてアロンソのマクラーレン・ホンダがカタルーニャ・サーキットで壁に激突。外見ではほとんど何の怪我也も負っていないにもかかわらず入院が長かったために、ERS（エネルギー回生システム）による感電説も出ているようだが、早いところ真相を出してもらわないと気持ち悪いのは確かだ。

現実的に考えて、今季のホンダにはあまり期待していないけれども、結果以前に安全性や情報公開の面で徹底していないようでは、F1の他のチームよりも頭一つ良いチームとして成長していくことは難しいと思う。事故後にできることをやらないという点は、FIAからも目を付けられるに違いない。

一方で、まだシーズン中のFormula Eのほうは、相変わらずF1に匹敵する（を超える？）面白さを見せているが、フランク・モンタニーに禁止薬物の陽性反応が出て、第三戦以降は出場停止となったのが残念だった。コカイン誘導体の反応のようだ。

モータースポーツでドーピングとは珍しい気もするし、実際ほとんど聞いたことがないのだが、それは単にドライバーの身体を増強し中枢神経系を興奮させたところで、ドライビングテクニクに何か有意な効果が出るわけではない、ということだと思う。ドーピングをやったところで、レース後半に急に異常な疲労が来て、大事故につながるだけの話だ。

一方で、マシンやエンジンには、レギュレーションをいかくぐつ

たギリギリの技術的な「ドーピング」が行われているのだと思う。ともかく、やはりドーピングをやったドライバーは追放処分が妥当だと思う。

【画像出典】

フォーミュラ E (Wikipedia)

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%95%E3%82%A9%E3%83%BC%E3%83%9F%E3%83%A5%E3%83%A9E>

「将棋電王戦 FINAL」の感想(「人間対将棋ソフト」の「人間対人間の揉め事」に・・・)

二〇一五年四月十六日 起筆、攔筆、公開

プロ棋士対コンピューター将棋ソフトの団体戦(五人対五ソフト)の最終回は、プロ棋士が三勝二敗で勝ち越した。

ここに来て、ようやくプロ棋士たちがソフト慣れしてきたこともあるだろうし、今まで以上にソフト耐性の高い若手棋士が集められたこともあると思う。五対五の団体戦という形では、これが最終回で、次回からは別の形での「電王戦」となるようだ。

私が最前している同い年の阿久津主税八段がソフト「AWAKE」に

勝った一局は特に嬉しかったが、この一局を含めて、今回の電王戦については、その内容に賛否両論が噴出している。

かなり色々な意見が出ているようだが、私もアマチュア中のアマチュアながら、普段から将棋の品性・品格にこだわる性格として、少し意見を書いてみたいと思う。

第三局(稲葉陽七段対やねうら王)と第四局(村山慈明七段対Ponanza)は、真つ向勝負で戦って結果的にプロ棋士が負けたというところで、いわゆる「将棋」という感じがしたし、棋譜にも特に「異様さ」は見られず、むしろ安心して見ていられた。プロが勝った第一局(斎藤慎太郎五段対Apery)についても、コンピューターらしい「へんな手」(いわゆる「思い出王手」のラッシュなど)はあったが、「将棋」という感じがあった。

そもそも、ソフト開発者・プログラマーがよく言う「ある分野・能力ではコンピューターが人間を越える時代が来る」という言説は、その時代の到来の善悪や、人間とコンピューターの優劣の議論以前に、こういう状況(程よい共存共栄)のことを言っているはずで、そこから外れた場合(将棋ソフトの話題とは無関係に、主催者と将棋連盟・プロ棋士と将棋ソフト業界の間で道義上の争いが発生した場合)は、「それに関与した(その原因を作った)人間の物事の考え方・価値観」のほうが批判されるべきだと思うのだ。

結局、「電王戦」や「将棋ソフト」や「コンピューターの未来」といった話題と全く関係のない「人間どうしの揉め事」になってしま

ったのが、第二局と第五局だったと思う。これらの対局と会見について、開発者への批判と永瀬六段・阿久津八段への批判の両方が飛び交っている。

第二局(永瀬拓矢六段 対 Selene)では、Selene が永瀬六段の「角不成」を認識できずに反則負けとなった。投了時点で、すでに永瀬六段が優勢だった。

永瀬六段は、Selene が「角不成」を認識できないことを事前研究において自力で発見していたようであるが、対局当日は、方が一(開発者がソフト改変禁止のルールを破って)「角不成」を認識できるようソフトを修正してきている可能性を考慮し、勝ちが見えたところであろうやく「角不成」を指したのだと思う。

(対局後の記者会見での三浦弘行九段の説明によれば、角不成の前から99%以上永瀬六段の勝ちの局面であり、それをより100%に近づける勝ち方をするために、永瀬六段はソフトの不備を利用して角不成と指した、とのこと。)

開発者の西海枝昌彦氏が、「角も成らないことがある」ことを開発段階でソフトに反映したはずがソフトが認識できなかったのならともかく、ソフトの他の部分での効率化のために「角不成」を最初からわざとソフトに組み込んでいなかったということだ。しかし、会見でソフトの不備について反省・謝罪し、プロ棋士を称えるコメントを発していたのは素晴らしかった。

谷川浩司将棋連盟会長も、「角不成のことばかりが話題になってしまっていますけれども、永瀬六段のほうはきちんと勝ちを読みき

た上での一手ですので、素晴らしい終盤の切れ味だったというふう

に思います」と語っている。

第五局(阿久津主税八段 対 AWAKE)では、阿久津八段が AWAKE に角を打たせてから捕獲する「2八角戦法」を指したことで、開始からわずか四十九分、たった二十一手で AWAKE が(というより開発者が)投了した。

対局後の会見では、開発者の巨瀬亮一氏が不機嫌さをあらわにし、**「アマチュアの方が指して既に知っているハメ形になって、それをプロが指してしまうというのは、(阿久津八段は)プロの存在意義を脅かすようなプロ棋士なんじゃないか」**、「今回の対局のように一番悪い手を引き出して勝つのは、ソフトを使う上で何の意味もない使い方」と阿久津八段を批判した。

一方の阿久津八段は、「素直にうれしいという感じではありませんが、とりあえず良かったと思います」、「普段はやらない形なので葛藤はありましたが、やはり団体戦で二勝二敗ということもあり、いちばん勝算の高い形を選ぶべきだと思いました」と語っている。

谷川浩司会長は、直前の会見で「あまりにも早い投了に驚きました。開発者が元奨励会経験者としての矜持で投了を決断されたのだと思います。」と無難なコメントを出されていたが、巨瀬氏が不機嫌さをあらわにしてからは、この第五局にはほとんど触れなかった。

電王戦においてプロ棋士とソフト開発者との間で雰囲気が悪いとき、谷川会長のなだめるようなバランスのとれたコメントや感覚は、毎度素晴らしいと思っ

て見ている。それでも、少しは本音を出

し、「ソフトの特性を詳細に研究し調べ尽くした成果だと思う」と阿久津八段を評価していた。

永瀬拓矢六段も、「プロ五人は最高のパフォーマンスをしましたが、存在意義としても十分ある」と語った。残る三名の棋士も、基本的には阿久津八段を擁護した。

さて、「相手の弱点を研究し、かつ将棋のルールは最大限に守って指す」ゲームが「将棋」である。「ソフトの弱点を突きつつ、将棋のルールは最大限に守って指した」永瀬六段と阿久津八段のゲームは「将棋」である。

一方で、Seleneの開発者の西海枝氏は、最初からわざと「角不成」をソフトに組み込んでいなかったとのことだが、プロ棋士で相手の「角不成」を想定しない棋士などいないのだから、Selene（と西海枝氏）が指したものは「将棋」ではなく、両対極者は「将棋」という同じ土俵に立っていないなかったと感じた。（永瀬六段が将棋を指し、Selene開発者がチェスなど他のルールで他のゲームをやっているようなものだった。）

AWAKE（と巨瀬氏）は、「将棋」を指したと言えるかもしれないが、全面的に開発者の意志によって投了し、開発者がAWAKEに対しそれ以上阿久津八段を相手に指させることを拒否したのだから、「人間対人間」の一局であり、「電王戦」ではないと思う。

それに、「2八角戦法」は、そもそも「ハメ手」ではなく、将棋ソフト全般に共通して見られる弱点で、「普通の戦法」であり、将棋ファンの間ではずっと以前から知られていた。その弱点を特にあから

さまに持っているAWAKEをプロの阿久津八段が借りて練習したのだから、阿久津八段が気づくのも時間の問題だった。

相手の弱点や最速最短の勝ち筋が見えているような状況で、わざとそれを避けて指すような細工をすることは、かえって相手に失礼に当たると思う。

阿久津八段の事前の勉強ぶりについては、以下の記事が詳しい。

「電王戦 FINAL 第五局 観戦記 野月浩貴七段」(ニコニコニュース)
<http://news.nicovideo.jp/watch/nw1548112>

それに、割と「普通の」将棋を指してPonanzaに負けた村山七段も、事前のインタビューでは、「見てるファンが賛否あるような指し方をするかもしれない」と予告していたし、相手が人間であろうとソフトであろうとその弱点を突くという姿勢は、決して阿久津八段だけのものではない。村山七段も、二〇一一年と二〇一二年に米長邦雄永世棋聖がボンクラーズを相手に二手目に指した6二玉のことをインタビュー中で挙げていたが、そもそもこの時から、将棋ソフトに対するプロ棋士の同様の姿勢は始まっていたのだった。

重要なことは、「将棋」を指しているかどうか、「電王戦」になっているかどうか、「人間対ソフトの揉め事」になっているかどうかという点だ。しかし、実際は「人間対人間の揉め事」になってしまった。

永瀬六段も阿久津八段も、ソフトの事前研究において、「角不成戦

法」や「2八角（を打たせる）戦法」などの有力な戦法を自力で発見していたようであるが、それらは全て「相手の弱点を研究する」という「将棋」の基本的態度であって、残るのは「プロ棋士のプライド」の問題だけとなる。

だから、永瀬六段が「角不成」の後にもしミスをして負けたとしても、それは立派な「将棋」であるし、阿久津八段がああの手の後にも勝っても負けても、それは立派な「将棋」であるとしか言えないと思う。谷川会長の発言の通り、永瀬六段はすでに優勢のところにも余裕を持って「角不成」を指したし、阿久津八段も「2八角」を打ってもらえなくても十分に指せた。

それに対して、ソフト開発者が行うべきことは、相手のプロ棋士の棋譜研究や、ソフトに対する反則や悪手の教え込み（プログラミング）であるはずで、それを飛び越えてプロ棋士を批判する態度には、やはり大きな疑問を感じた。

今回の電王戦では、プロ棋士たちは優秀な「デバッガ」であったと言えるのではないだろうか。ソフト開発者を個人的に批判することなく、ソフトを「新たな相手」として対等に認めて、淡々と弱点を突く手を指したのだから。

プロ棋士は、勝っていても負けていても、「ソフトとソフト開発者から学んだことは多く、自分の将棋の未熟さも知ることができた。今後に生かしたい」という旨の発言を五人全員が発し、ソフト開発者と主催者を批判した棋士は一人もいなかった。

一方で、何人かのソフト開発者の口からはプロ棋士批判と主催者

批判が目立った。とりわけ、AWAKEの開発者は、阿久津八段やプロ棋士に対し、Seleneの開発者とは対極的な態度をとる結末となった。

こう考えてみると、本当の「電王戦」とは、以下のようなものと言うのではないかと個人的には考えているし、次回の「電王戦」にはそれを期待したい。今回の「電王戦」もやはり、人間対コンピューターのルールを守ったゲームどころではなく、人間対人間のルール外での問題が多すぎたと思う。

●今後の電王戦で個人的に変更してほしいルール
（ソフトの挙動とソフト開発者の意志・プロ棋士への批判の切り分け）

◆意図的に将棋のルールをソフトに組み込んでいないことが判明した場合、出場停止とする。（「駒不成」のプログラミンの省略など）
ただし、開発者がこれをプログラミンしたはずが、ソフトが認識できず反則手を指した場合、そのまま反則負けとするが、開発者の次回の出場権は保持される。

◆ソフトやマシン自身が投了に当たる動作（停止、バグ、暴走、反則、物理的故障など）を見せるまで、開発者は手出し口出しや投了をしてはならない。（開発者の恣意的な判断による投了の禁止。これ

を反則とする。)

◆ 開発者の恣意的な判断を対局から遠ざけ、ソフト自身による投了を促すため、開発者が投了のアルゴリズム・プログラムをソフトに組み込む期間（数ヶ月〜数年）を定め、この間に組み込むことができなかつたソフトは出場権を得られないものとする。

● 将棋電王戦(niconico)の YouTube チャンネル
<https://www.youtube.com/user/denou>

● 電王戦関連ニュース

◆ 「将棋電王戦 FINAL」第五局は阿久津八段の勝利(日本将棋連盟)
<http://www.shogi.or.jp/topics/event/2015/04/final5.html>

◆ 将棋ソフトにプロが初の勝ち越し 阿久津八段が面目保つ(産経ニュース)

http://www.sankei.com/life/news/150411/life_1504110023-n1.html

◆ 将棋・電王戦棋士側勝利呼んだ「わざと隙見せる作戦」(毎日新聞)
<http://mainichi.jp/feature/news/20150412k0000m040087000c.htm>
一(リンク切れ)

◆ 谷川会長「ほっとしている」 電王戦、棋士初の勝ち越し ソフ

トの弱点突く(日本経済新聞)

http://www.nikkei.com/article/DGXLASFG11H2O_R10C15A4000000/

● 【意識調査】電王戦 FINAL 第五戦、「ハメ手」でのプロ棋士勝利をどう思う？

<http://polls.dailynews.yahoo.co.jp/other/15702/result>

F1 ジュール・ビアンキの死亡事故

二〇一五年八月八日 起筆、攔筆、公開



最近では、あまりF1を見ていない。いや、まずはF1関連ウェブサイトで結果を見てから、面白そうなシーンや、問題のピットインのシーン、事故のシーンなどを手動早送りハイライトで見ると、という、生粋のF1ファンが一番やってはいけない見方をしている。

理由としては、時間がないからではなく、レギュレーションが政治的に決まってしまう現状に飽きてきたことなどもあって、やはり電気自動車レース Formula Eファンに寝返ろうかという思いがくすぶり続けているからである。それから、長年F1ファンをやっている、と、いざというときに、どのドライバーがどういうことになったかについての全貌がハイライトだけを見ただけで分かるということもあるかもしれない。

そんな中、昨年の鈴鹿の決勝レース中に、別のマシン（スーティルのザウバーのマシン）を撤去中だった重機（ホイールローダー）に激突して昏睡状態に陥っていたジュール・ビアンキ（マルシャ）が、七月十七日に帰らぬ人となってしまい、いつかは本当にフェラーリに移籍していたかもしれないこの有能ドライバーの死にも、色々と思うところはあるのである。

レースウィーク中のF1ドライバーの死亡事故としては、一九九四年サンマリノGPでのアイルトン・セナ、ローランド・ラッツェンバーガーの死亡事故以来二十一年ぶりである。

それが日本、鈴鹿で起きたことに、何らかの意味深長な追求を失ってしまいそうな雰囲気は、当初、海外のファンの間でも、あるには

あったが（以前書いた以下のブログ記事もご参照）、サーキットの構造や安全性、コースマシーシャルの行動に特に問題はなく（個人的にも、鈴鹿は総合的に見て世界最良のサーキットの一つだと思う）、三重県立総合医療センターの医療チームも、転院先のニース大学付属病院の医療チームも全力を尽くし、当時のビアンキの速度やフラッグの解釈にも問題はなかったよう、結局のところ不運としか言いようがない事故なのである。

●ビアンキの無事を祈り、チェザリスの死を悼む

<https://iwasakijunichi.net/iwasaki-jict-blog/104270357.html>

●ジュール・ビアンキの事故についての続報

<https://iwasakijunichi.net/iwasaki-jict-blog/104298367.html>

さて、人の死に対する弔意・哀悼の意ということについて、余談だが、最近英語圏では「RIP」という表現が流行しているようだ。

「Rest in peace」の略、つまり日本語では「冥福をお祈りいたします」に近いようである。ラテン語の「Requiescat in pace」から来ているらしく、英語だと頭文字が同じでよかったですね。

早速、ビアンキに対して、同僚のドライバーたちも（小林可夢偉も含めて）この略語で弔意を表していた。

しかし、日本人は人の生老病死に至るまで西洋世界のマネ事をするのが好きらしく、最近では、日本人が日本人に対して「誰それがお

亡くなりになり、残念です。R.I.P」などと使っている例を見かける機会も増えている。

キリスト教と仏教の違い、「Rest in peace」と「冥福」の違いも、どうでもよいと思ってゴチャ混ぜにして使っている点も、誠に日本人らしいと思っっている。

F1は、今でも西洋圏では、人によっては半ば貴族・紳士・白人のスポーツであると思っっているケースもあり、身分・人種差別で人選が決まるようなことだっっているが、あちらの人々が自国民や他の欧州国民に対して「ゴメイフクヲオイノリシマス」などとゴチャ混ぜに言うとは思えない。ゴチャ混ぜ体質というのは、良くも悪くも特筆すべき日本人の宗教観の表れであると思っう。

話がそれだが、ビアンキはビアンキで、自分が信じていたところに行けばいいと思っうし、今頃セナやラッツェンバーガーとレースしていればいいと思っうのみである。

【画像出典・著作権情報】

● ジュール・ビアンキ (Wikipedia)

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B8%E3%83%A5%E3%83%BC%E3%83%AB%E3%83%BB%E3%83%93%E3%82%A2%E3%83%B3%E3%82%AD>